

# 学習者オートノミー育成に向けた学生支援を考える — わせだ日本語サポートと他箇所との連携から —

古屋 憲章・木下 直子・武田 誠・稲垣 みどり・  
太田 裕子・舘岡 洋子・陳 永盛・山田 英貴

## 要旨

本稿では、「わせだ日本語サポート」（早稲田大学に在籍する留学生の自律的な日本語学習＝学習者オートノミーを支援するシステム）と早稲田大学内の各箇所、具体的には、国際教養学部グローバルネットワークセンター、ライティング・センター、留学センター、キャリアセンターが、留学生に対する支援に関し、どのようなビジョンに基づき、どのように連携を構想し、展開したかを報告する。具体的には、オートノミーの育成について留学生を対象とする支援の理念として箇所間で共有したうえで、連携をとおして、次の三つの場をどのように構築しているか／していくかを記述する。a.（オートノミーの育成という）理念を共有する場。b. 各箇所間で連携して支援実践にあたる場。c.（「留学生は支援されるべき人」と一方的にとらえるのではなく）「支援される側」と「支援する側」という二項対立を超えて、協働で問題を解決する場。

キーワード：オートノミー、留学生支援、ピア・サポート、箇所間連携、ネットワーク

## 1. 本稿の背景と目的

本稿では、「わせだ日本語サポート」（以下、「サポート」）と学内の各箇所、具体的には、国際教養学部グローバルネットワークセンター、ライティング・センター、留学センター、キャリアセンターが、留学生<sup>1)</sup>に対する支援に関し、どのようなビジョンに基づき、どのような連携を構想し、どのように連携を展開したかを報告する。「サポート」は、早稲田大学に在籍する留学生の自律的な日本語学習＝学習者オートノミー<sup>2)</sup>を支援するシステムである<sup>3)</sup>。「サポート」では、常駐する「サポート」スタッフ（大学院生）によるサポート実践（日本語学習アドバイジング、日本語学習リソースに関する情報提供、日本語学習相談）が展開されている。「サポート」スタッフは、2011年度～2016年度は臨時職員として、2017年度以降は自学自習TAとして、大学に雇用されている。

「サポート」は、日本語教育研究センター（Center for Japanese Language, 以下、CJL）における教育活動の特徴の一つである「主体性の重視」を支える実践である。舘岡（2016）は、CJLにおける「サポート」の位置づけに関し、次のように述べている。

CJLでは、（中略）学習者がそれぞれの目標や興味、関心に応じて科目を選択し、自分にふさわしいプログラムを自分自身で構築するのです。（中略）学習者のこのような主体的な学びを支えているのが、「わせだ日本語サポート」というサポートシステ

ムです。「わせだ日本語サポート」では、(中略)自分自身の日本語学習の目的、目標、方法、計画等について、スタッフといっしょに考えることによって、学習者それぞれが自分の学習に関して、さまざまな気づきを得て、自身の学習を主体的に進めていくことができるようになります。(pp.4-5)

「サポート」では、これまで留学生からの日本語学習に関する様々な相談事例を積み重ねてきた。相談事例の積み重ねや定例ミーティングにおける事例検討をとおして、「サポート」スタッフらは、留学生が抱える問題が単に日本語学習の問題に留まらず、様々な問題が複合的に絡み合っているのではないかと考えるようになった。また、問題が複合的であるがゆえに、担当箇所が特定されず、結果的に問題を抱えた学生が各箇所をたらい回しにされるというような事例にも直面するようになった。例えば、次のような事例である。

- ・日本語の授業で課されたレポートに関し、「サポート」に相談に訪れた学生をライティング・センターに誘導したところ、当該の学生がライティング・センターで「日本語の形式に関しては、「サポート」で」と言われ、「サポート」に戻ってきた。
- ・就職活動に必要なエントリー・シートの文章に関し、「サポート」に相談に訪れた学生をキャリアセンターに誘導したところ、当該の学生がキャリアセンターで「日本語の形式に関しては、「サポート」で」と言われ、「サポート」に戻ってきた。

以上のような「サポート」スタッフらの問題意識に基づき、「サポート」スタッフの一人である古屋が、留学生関係箇所の担当者によるパネルディスカッション「多文化共生キャンパスにおける学生支援を考える—箇所間連携の可能性とオートノミー・問題発見解決能力の育成—」を企画した。同パネルは、2016年9月18日に行われた早稲田大学日本語教育学会2016年秋季大会において、CJL、国際教養学部グローバルネットワークセンター、ライティング・センター、キャリアセンター、留学センターの各担当者<sup>4)</sup>をパネリストとして行われた。パネルの目的は、次の3点であった。

- ①各箇所掲げられている留学生を対象とする支援の理念を共有する。
- ②各箇所で行われている留学生を対象とする支援の取り組み、及び実践事例を共有する。
- ③各箇所間での連携の具体像を共有する。(木下ほか, 2016, pp.2-3)

パネルでは、まず、各担当者が各箇所で行っている留学生支援の理念、取り組み、及び具体的な実践事例を紹介した。次に、各箇所から提示された実践事例をもとに、留学生支援のあり方、及び箇所間の連携に関し、議論を行った。

議論の結果、まず、オートノミーの育成を留学生を対象とする支援の理念とすることがあらためて確認された。そのうえで、オートノミーを促すための取り組みとして、次の三つの場を設けることが提案された。a. (オートノミーの育成という)理念を共有する場(例えば、スタッフの合同研修)。b. 各箇所間で連携して支援実践にあたる場。c. (「留学生は支援されるべき人」と一方的にとらえるのではなく)「支援される側」と「支援する側」という二項対立を超えて、協働で問題を解決する場。これらのうち、特にb, cに関し、館岡(CJL)より次のような具体的な提案があった。

- b. 一つの相談事例に対し、複数の箇所の担当者が関わる合同アドバイジングを行う。
- c. 合同アドバイジングを段階的に教職員によるサポートから留学生、日本人学生にかか

ならず学生同士がお互いの学習者オートノミーを育て合うピア・サポートへと切り替えていく<sup>5)</sup>。

併せて、学生支援実践を行う際に用いるツールとして、共通のポートフォリオを活用することも提案された。

パネル終了後、「サポート」をハブとして、上述した a, b, c の場の構築を目指した各箇所間の連携が開始された。2 章では、各箇所における学生支援の現状を紹介したうえで、「サポート」と各箇所がどのように連携するかに関する構想を述べる。3 章では、2 章で紹介した構想が一部実現した事例を紹介する。

## 2. わせだ日本語サポートと各箇所の連携案

本章では、国際教養学部グローバルネットワークセンター、ライティング・センター、留学センター、キャリアセンターが、留学生に対する支援に関し、「サポート」とのどのような連携を構想したかを報告する。

### 2-1. 国際教養学部グローバルネットワークセンター

#### (1) 学生支援の現状

「SILS 英語学習アドバイザー」は、国際教養学部 (SILS) 内のグローバルネットワークセンター (GNC) で SILS の学部生向けに提供されるサービスのひとつである。現在、2 名の英語教育助手により行われており、学生の英語学習に関する相談を受け付けている。学生は My Waseda の申請フォームより、①相談したい案件、② TOEFL, IELTS などを受験した経験のある者はその点数、③海外の滞在経験等を記入し、申請し、日時を予約する。対象者は SILS の学生すべてに開かれているが、今まで利用した学生はスタディプラン 1 (SP1) と呼ばれる日本語で教育課程を修了した学生が主である。

#### (2) 「サポート」との連携案

「サポート」との連携に関するアイデアとして、まずは「言語学習アドバイザー」の理念の共有が挙げられる。すでに SILS の英語教育助手 2 名が 2017 年 3 月に実施された「サポート」のスタッフ研修に参加し、「サポート」スタッフとともに、「サポート」の理念や「サポート」スタッフの役割を把握した。SILS 英語教育助手の一人は第二言語習得理論 (音声) が専門分野、一人は日本語教育 (年少者日本語教育) が専門分野であり、二人とも言語教育が専門領域ではあるものの、「言語学習アドバイザー」を深く学んだ経験がないので、「サポート」スタッフとの合同研修は非常に有意義であった。今後も「サポート」運営側が主催する「言語学習アドバイザー」をテーマとする読書会や勉強会等に SILS 英語教育助手が参加する形でともに学び、議論に参加することで、「言語学習アドバイザー」の理念を共有していくことができると考えている。また「理念の共有」のみでなく、「サポート」と「SILS 英語学習アドバイザー」がお互いの実践の事例を開示し合い、ケーススタディ的な手法でアドバイザーのスキルを学ぶことも可能であるとする。ただし「SILS 英語学習アドバイザー」に来訪した学生の個人情報を守秘する必要があるため、個人が特定されるような情報開示を学内といえども、SILS 外の

機関に行わないことに常に留意しなくてはならない。学生の個人情報保護といった側面から、「サポート」と「SILS 英語学習アドバイジング」の来訪者を行き来させるといった形での協働アドバイジング実践に対しては様々な課題がある。まず「SILS 英語学習アドバイジング」を統括する SILS 英語カリキュラム委員会の判断を仰ぐ必要があり、学生への告知の必要性も生じる。

したがって、現在のところは「サポート」との連携について、「SILS 英語学習アドバイジング」の実践者がスタッフ研修や読書会、勉強会等を通じて「言語学習アドバイジング」の理念を共有し、アドバイジングのスキル向上を目指していくことがもっとも実現可能かつ有意義な連携案であると考えられる。

## 2-2. ライティング・センター

### (1) 学生支援の現状

ライティング・センターは、文章作成のための個別支援機関である。研修を受けた大学院生チューターが、対面で書き手の文章作成を支援する。ライティング・センターの理念は、「自立した書き手」の育成である。つまり、書き手が一人で文章を作成し修正できるように支援するのである。そのために、チューターは書き手と対話しながら、書き手が自分で文章の修正案に気づけるよう支援する。

ライティング・センターでは、日本語・英語文章を扱う。日本語文章を検討するセッションには、日本語母語話者対象の JJ セッション、日本語教育専門のチューターによる JS セッション、日本語文章を英語で検討する JE セッションの3 カテゴリーがある。英語文章を検討するセッションでは対話の言語を、英語、日本語、中国語、タイ語から選ぶことができる。

### (2) 「サポート」との連携案

JS セッションは提供される数が少ないため、JJ セッションを日本語学習者が利用するケースも非常に多い。日本語教育を専門としない JJ チューターには、ネイティブ・チェックを強く求める日本語学習者とのセッションに難しさを感じる者も多い。文法や表現を扱いながら書き手主体の対話を行うことが難しいのである。経験の浅い JJ チューターの場合、「自立した書き手」の育成という理念に反して一方的に文章を直してしまうか、日本語の形式には一切触れず、JS セッションや「サポート」の利用を勧める傾向がある。そこで、日本語学習者に対するよりよい支援のために、「サポート」と次のような連携が望まれる。第一に、日本語学習者の文章作成支援における連携である。日本語学習者とのセッションを、JJ チューターと「サポート」のスタッフが協働で行う場を設ける。JJ チューターは、学術的文章作成支援、「自立した書き手」の育成という視点から、「サポート」スタッフは日本語教育専門家、オートノミー育成という視点から、相互補完的に支援する。第二に、研修における連携である。例えば、文法や表現を書き手主体で検討する方法、チューターに依存してしまう書き手への対応といったテーマが考えられる。ライティング・センターが行うチューター研修に、「サポート」のスタッフが参加した事例もある。今後さらに合同研修の機会を増やしていくことが望まれる。

## 2-3. 留学センター

### (1) 学生支援の現状

留学センターは、全学協定に基づく交換留学生を受け入れる際の窓口として、来日直後のオリエンテーションはじめ様々な支援を行っている。オリエンテーションにおいては、銀行口座開設、住民登録届、国民健康保険など日本での生活に不可欠な手続きを詳細に説明するとともに、本学の異文化交流センター（ICC）を紹介するなど、外国人留学生と日本人学生との交流を促進するべく、学生への周知に注力している。留学生の地域ごと国ごとの文化的、社会的背景の違いも大きいことから、地震が起きたときの対応という天災の話から、自転車の防犯登録といった実生活の細かい話まで日本での生活に順応するうえでのきめ細かいケアを行っている。

外国人留学生と日本人学生の交流という観点においては、交換留学生対象の学生寮に Resident Assistant (RA) を配置し、異国で生活する交換留学生に対して日常的なサポートを行っており、RA を務める日本人学生にとっても多様な生活環境下における貴重な成長機会となっている。学生の変調は生活面から把握できることも多く、寮での様子から管理人、RA と連動し、早期発見と適切な学生指導により大事に至らず解決につながった事例も多い。

こうした学生同士の主体的な交流というのは、本学の強みの一つであり、留学センターにおいても学生留学アドバイザーというボランティア団体が組織されている。留学センターのプログラムをとおして海外留学を経験した学生によって2005年に設立されたもので、自らの留学経験を後輩に伝え、アドバイザーのサポートを受けて留学した学生が帰国後に留学アドバイザーになるという学生間の好循環が生まれている。また、本学で受け入れる外国人留学生に対する日本語の勉強等への助言については、チューター制度が設けられており、現状では外国人留学生が7割、日本人学生が3割という割合でチューターを担っている。支援内容としては、学部・大学院に新入した留学生を対象とし、初年度1年間チューターからの指導が受けられる制度となっており、慣れない環境下での学習支援として機能している。

### (2) 今後の連携案

前述のとおり、本学の強みの一つである学生の自発的な交流を促進するため、例えば、留学センターの留学アドバイザーとライティング・センターのチューターなど、支援する側の学生同士の連携を強め、各箇所での縦関係に横断的な関係が交わることによって、より有機的な交流が生まれる可能性を感じている。

## 2-4. キャリアセンター

### (1) 学生支援の現状

キャリアセンターは、①教育・研究活動第一主義、②低学年生に対しては学内のガイド役、③就職活動を行う学生に対しては企業・採用等情報の提供役、④社会への発信という四つの基本的な考え方に基づいて、具体的には次のような学生支援をしている。

①に基づき、学生が授業や課外活動を十分に満喫できる期間と環境を維持しつつも、将来、学生が社会、所属する組織の中で存在感のある人物として活躍できる場を自力で選ぶ

手助けをしている。②に関しては、学部生は入学後最初の3年間（大学院生は1年間）が自分の生き方や進路を見極める期間だと考え、入学時に導入・動機付けとして学内のあらゆる知的成長の場を学生に紹介し、自分の志向に適した活動ができるようサポートを行っている。③は、就職活動を行う学生への情報提供である。④は、学生が充実した教育・研究を行う期間をなるべく長く確保し、落ち着いた学生生活を過ごせるよう、産業界や経済界など、広く社会に対して最終学年の夏季以降の採用活動実施、また、大学の施設での採用に直結する活動の自粛を強く働きかける取り組みである<sup>6)</sup>。

外国人留学生を対象とした取り組みとしては、留学センター、社会科学部、政治経済学部、国際教養学部、アジア太平洋研究科、経営管理研究科、情報生産システム研究科（IPS北九州）等での外国人留学生のためのキャリア支援セミナー実施、CJL 開講の就職活動関連日本語科目履修生へのキャリアセンター紹介などを行っている。

図1は2016年度の早稲田大学の外国人留学生（正規生）の進路状況をまとめたものである。就職した卒業・修了生は約50%（37%が日本国内、11%が海外）である。就職先の業界は過去3年、メーカー、情報通信、商業、専門サービス等が多い。約20%の「活動中」の卒業・修了生の最終的な進路は、本人が自主的に大学へ報告しない限り把握が難しい状況である。しかし、今後、WASEDA VISION 150における「外国人留学生1万人計画」の実現のため、実績の追跡が非常に重要な課題となっている。

## (2) 「サポート」との連携案

日本企業が外国人留学生に求める日本語力は決して低いものではない。独立行政法人国際交流基金と公益財団法人日本国際教育支援協会が共催している日本語能力試験（Japanese Language Proficiency Test; JLPT）を指標とした場合、最低限N2合格相当の日本語力が必要で、N1合格レベルの日本語力を持っていることが望ましいと考える企業が多い。この点を考慮すると、「サポート」とキャリアセンターとの連携が望まれる。

具体的な連携案としては、CJLが所在すると同時に、日本語科目の多くが行われてい

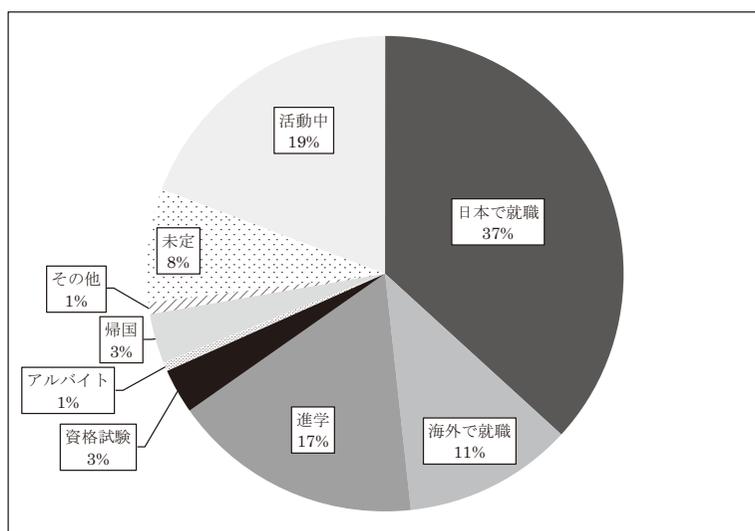


図1 2016年度 早稲田大学の外国人留学生進路状況（学部・研究科）

る 22 号館において、外国人留学生を対象とする、日本での就職活動に関するセミナー及び個別相談の実施が挙げられる。また、キャリアセンターの職員だけでなく、学生キャリア・アドバイザー（SCA）<sup>7)</sup> の CJL 日本語科目への参加も考えられる。そのほか、SCA、Student Career Staff (SCS)<sup>8)</sup>、ライティング・センターのチューター、「サポート」スタッフが SCA 育成研修に参加し、互いに連携を強化することもできるだろう。

### 3. わせだ日本語サポートと各箇所の連携事例

1 章で述べた通り、2016 年秋のパネルディスカッションでオートノミーを促すための取り組みとして、a. 理念を共有する場、b. 各箇所間で連携して支援実践にあたる場、c. 「支援される側」と「支援する側」という二項対立を超えて、協働で問題を解決する場を持つことが提案された。そこで 3 章では、パネルディスカッション以降、取り組んできた「サポート」と各箇所の連携事例について紹介する。

まず、a. 理念を共有する場として、国際教養学部グローバルネットワークセンター、ライティング・センターとの連携がある。

「サポート」では、毎学期開始前に 2 日間（4 時間半程度）のスタッフ研修を行っている。研修には、新規スタッフや継続スタッフに「サポート」の理念（自学習の実現をサポートするため、ティーチングやチュータリングではなく、日本語学習アドバイジングの実践を目指す）、「サポート」スタッフの役割（アドバイザー、ナビゲーター、学習リソースの提供者）、支援の際の留意事項、支援活動の流れなどを理解するとともに、業務分担をしておくというねらいがある。2017 年度春学期開始前に行われたスタッフ研修には、2-1 で紹介したように、国際教養学部グローバルネットワークセンターでアドバイジングを担当する助手 2 名が参加し、「サポート」の理念や「サポート」スタッフの役割に関する理解を共有した。また、二つの相談事例（①日本人らしく日本語を話せるようになるにはどうしたらいいか。②聴解の勉強方法と計画についてアドバイスがほしい。）に関し、どのように対応するかを「サポート」スタッフと助手で検討した。検討においては、お互いの支援実践の経験を参照しつつ、活発な意見交換が行われた。

2017 年度春学期現在、延べ 802 名の国際教養学部にも所属する日本語科目履修者がいる。今後、これらの日本語学習者が相談に訪れた際、希望に応じて、助手が相談者とともに「サポート」に来て対応にあたるというフローの選択肢があることを確認している。

ライティング・センターについては、2-2 にあるように、大学院生がチューターとなり、日本語や英語で書かれた学術的文章を指導しているが、チューター自身の成長のために、チューター研修が定期的に行われている。2016 年度秋学期には、そのチューター研修に「サポート」担当教員 2 名、スタッフ 1 名が参加し、他の参加者とともにオートノミーを促すための理念、対応を学んだ。

また、「サポート」では毎学期、スタッフが自主的に読書会を開き、日本語学習アドバイジングに関連する本を読んで議論している。2017 年度春学期にはこの読書会に国際教養学部グローバルネットワークセンター助手が参加し、「サポート」スタッフらとともに、対象図書の内容をアドバイジングにおける対応と結びつけて検討した。読書会には、今

後、ライティング・センターのチューターも参加することとなっている。

次に、b. 各箇所間で連携して支援実践にあたる場としては、キャリアセンターとの連携が挙げられる。2016年度秋学期から「サポート」はキャリアセンターとの共催で、昼休みに留学生を対象とした就職活動に関するセミナーと個別相談を開催している。2017年度春学期終了時までに既に4回（各学期2回ずつ）のセミナーと個別相談会を実施した。セミナーでは、①日本での就職活動スケジュール、②就職に必要な日本語力、③その他、就職活動を行う上での注意点等の説明をキャリアセンター職員が30分程度、英語・日本語で行っている。個別相談はセミナーの翌週、セミナーを行ったキャリアセンター職員が「サポート」室に出向して行っている。



図2 就職活動に関するセミナー



図3 個別相談

最後の、c. 支援される側と支援する側の枠を超えて問題を共有する場については、未だ他箇所との具体的な連携実施には至っていない。しかし、2-4で述べた、キャリアセンターのSCA育成研修に「サポート」スタッフのみならず、「サポート」来訪者が参加するようになれば、支援者、被支援者という枠を超えた問題共有の場になる可能性がある。

#### 4. 今後の連携に向けての構想

1章で述べたように、現状では、一人の学生に対する支援実践が各箇所別個で行われている。これは、複合的な問題を抱えた学生が各箇所をたらい回しにされる原因の一つでもある。また、一人の学生に対し、整合性を欠いた支援が行われている可能性がある。

合同アドバイジングは、ある一つの事例に対し、各箇所の支援者が即興的に協働するという意味で、山住（2008）が主張する「ノットワーキング（knotworking）」（＝結び目づくり）とも言える。ノットワーキングとは、「人やリソースをつねに変化させながら結び合わせ、人と人との新たなつながりを創発していくような活動」（p.39）の形態を示す概念である。ノットワーキングは、「いわゆる「チーム」や「ネットワーク」とは異なる」概念である。ノットワーキングにおいては、「チーム」や「ネットワーク」のような「編成が生まれては消え、別のかたちで再度現れる、といった律動がくりかえされる」。また、「要求される課題ごと、その場その場で、コラボレーションの関係を組み替えていく」（p.40）。箇所間連携とは、単にお互いの取り組みを紹介し合ったり、情報を共有したりす

ることではなく、ネットワークング、すなわち、学生支援に関わる各箇所が、個別の事例に応じ、即興的なコラボレーションを展開していくということであろう。今後、多様な言語・文化的背景を持つ学生が抱える複合的な問題に対し、効果的な支援実践を持続するためには、ネットワークングとしての箇所間連携が必要不可欠となる。

また、2016年度には、「サポート」スタッフの養成をねらいとして、学内のグローバルエデュケーションセンターに日本語教育副専攻科目「日本語学習アドバイジング」が設置された。これにより、「サポート」スタッフに応募できる資格が、大学院生のみから当該科目を修了した学部生にも広げられた。1章で述べたように、各箇所間で連携して学生のオートノミーを促すための取り組みとして、「合同アドバイジングを段階的に教職員によるサポートから留学生、日本人学生にかかわらず学生同士がお互いの学習者オートノミーを育て合うピア・サポートへと切り替えていく」ことが構想されている。今後、学部生が「日本語学習アドバイジング」の履修を経て、「サポート」スタッフとしてサポート実践を行うようになれば、学生同士がお互いの学習者オートノミーを育て合うピア・サポートの実現が今以上に促されると予想される。

## 注

- 1) 本稿において留学生とは、単に外国人学生だけではなく、広く日本語を母語としない学生も含む。例えば、日本国籍であったとしても、様々な国・地域を移動しながら育ったため、日本語が母語ではないという場合もある。
- 2) 学習者オートノミーとは、「自分の学習に関する意志決定を自分で行なうための能力」であり、「学習の目的、目標、内容、順序、リソースとその利用法、ペース、場所、評価方法を自分で選べるということ」（青木・中田，2011，p.2）である。
- 3) 早稲田大学では、近年、留学生の増加にともない、キャンパスの多言語化・多文化化が急速に進行している。その一方で、留学生が、教室外でどのように日本語学習を進めればいいかわからない、日本語が使われる場面で日本人と知り合うことが難しい等、日本語の学習／使用をめぐる様々な問題に遭遇している。このような状況に対応するため、2011年に「サポート」が設置された。
- 4) パネルディスカッションの登壇者は、次のとおりである。舘岡洋子（日本語教育研究センター 所長）、木下直子（日本語教育研究センター 教務主任 兼 わせだ日本語サポート担当教員）、稲垣みどり（国際教養学部 英語教育助手）、太田裕子（グローバルエデュケーションセンター アカデミック・ライティング教育部門担当教員）、山田英貴（留学センター 職員）、陳永盛（キャリアセンター 職員）。なお、（ ）内は、早稲田大学日本語教育学会 2016年秋季大会開催時（2016年9月）の所属・役職である。
- 5) 現状でも、各箇所学生スタッフの活用が行われている。例えば、「サポート」、ライティング・センターでは、大学院生がそれぞれ支援スタッフ、チューターとして業務に携わっている。また、（本稿では連携に言及されていないが）異文化交流センター（ICC）でも、大学院生／学部生が学生スタッフとして業務に携わっている。
- 6) 早稲田大学キャリアセンターの基本的な考え方に関する詳細は、キャリアセンターのウェブサイト（<https://www.waseda.jp/inst/career/about/support/>）を参照のこと。
- 7) 学生キャリア・アドバイザー（Student Career Advisor: SCA）とは、就職活動生の就職相談に乗る、就職内定者の学生ボランティアである。
- 8) Student Career Staff (SCS) もキャリアセンターの学生ボランティアであるが、SCAとは兼任できない。キャリア関連企画の立案・運営・情報発信や、自己成長のためのスキルアップ勉強会の開催がSCSの主な業務である。

## 参考文献

- 青木直子・中田賀之 (2011) 「学習者オートノミー—初めての人のためのイントロダクション—」  
青木直子・中田賀之編 『学習者オートノミー—日本語教育と外国語教育の未来のために—』  
ひつじ書房, 1-22.
- 木下直子・館岡洋子・太田裕子・山田英貴・陳永盛・稲垣みどり・武田誠・古屋憲章 (2016) 「多  
文化共生キャンパスにおける学生支援を考える—箇所間連携の可能性とオートノミー・問題  
発見解決能力の育成—」『早稲田大学日本語教育学会 2016 年秋季大会予稿集』, 2-5.
- 館岡洋子 (2016) 「ことばの学びの中継点として—多様性, 主体性, 開放性をもった C JL へ—」  
『早稲田日本語教育実践研究』4, 3-6.
- 山住勝広 (2008) 「序章 ネットワークからネットワークへ—活動理論の新しい世代—」山  
住勝広・エンゲストローム, ユーリア『ネットワーク—結び合う人間活動の創造へ—』  
新曜社, 1-57.

## 謝辞

本稿 2-4 に掲載された図を作成するにあたり, 池ノ谷祐子氏 (早稲田大学キャリアセン  
ター) にご協力いただきました。ここに感謝の意を表します。

(ふるや のりあき, 早稲田大学大学院日本語教育研究科院生)  
(きのした なおこ, 早稲田大学日本語教育研究センター)  
(たけだ まこと, 早稲田大学日本語教育研究センター)  
(いながき みどり, 早稲田大学国際教養学部)  
(おおた ゆうこ, 早稲田大学グローバルエデュケーションセンター)  
(たておか ようこ, 早稲田大学大学院日本語教育研究科)  
(たん えんせん, 早稲田大学キャリアセンター)  
(やまだ ひでたか, 早稲田大学国際部 兼 留学センター)